The Staff of Kyoto City School of Arts and Crafts

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 芳樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/00000255

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

京都市立美術工芸学校の教職員

松尾　芳樹

【抄録】
明治 13 年に開校した京都府画学校の教育は、府下の産業界や行政側の期待に応えることができなかった。そこで、従来の絵画教育に図案教育を新たな柱として加え、国の実業教育政策に対応したのが美術工芸学校である。絵画科、図案科、彫刻科、漆工科の四つの専攻を主に、京都の美術界に貢献した。学校の教育を支えた教職員についてその変遷をたどると、学校の教育体制が時間軸の中でどのように形成されていたか合理的な理解を得ることができる。絵画科においては、四条派を主流とする師承の形成が見られ、上級学校として生まれた絵画専門学校との密接な関係がうかがえる。図案科においては絵画教育から工芸図案教育への転換が教員構成に明確に表れ、彫刻科、漆工科においては、東京美術学校との人的交流の存在が見られる。

１．はじめに

明治 13 年に開校した京都府画学校が行った当初の教育は、近世以来の絵画教授を継承するものだったが、手工業が大きな役割を担う京都の産業界にとって、必ずしも期待を満足させるものとはならなかった。やがて、図案を学ぶ専攻が設置され、絵画教育とともに図案教育のカリキュラムが組まれると、改編、改称を重ねるようになり、最終的には京都市立美術工芸学校となった。国の進める実業教育政策の追い風を受けて、絵画科、図案科、漆工科、彫刻科の四つの専攻を中心に[1]、中等教育ながら京都における美術の専門教育を担ったのである。

それでは、この学校の教育はどのような教職員体制で行われたのであろうか。京都市立芸術大学『百年史』に「教員在職一覧表」が収録されているが[2]、教員がどの専攻を担当したか不明のため、教育体制を理解するには不十分なところがある。そこで、在職教員を専攻に分けて時系列に従って模式化したのが別表「京都市美術学校～京都市立美術高等学校教員一覧」である。『百年史』の補訂を含め、各専攻の教育体制をわかりやすくした[3]。

美術工芸学校の職員は大きく校長、教員、書記、校医に分けられる[4]。専任教員は教諭[5]、助教諭、助手の区別があり、これに非常勤講師にあたる嘱託教員が加わる。ほかに教諭心得、助教諭心得、技手、技師を任命することもあった。書記は事務職だが、教員を兼任する場合もあり、一時期には事務を統括する監事が置かれたこともあった。教員がどの専攻担当に任じられたのか、公的な記録にも書き残

されていないことが多く、資料から推測するほかない。本稿はこのような教職員の変遷をたどることにより、学校の教育体制を考察するものである。

明治 22 年に学校が京都市へ移管された直後の京都市画学校では、教職員は 5 人、生徒も 66 人にすぎなかった[6]。この時期に最も学校の体制が弱体化しており、一時は学校の廃止すら検討されている[7]。美術学校期は教職員が 10 人に満たない状態が続くが、美術工芸学校の時代になると、校舎移転後[8]に教育体制の整備が進み教職員は増加する。実業教育に対する国からの補助金交付に助けられ、学校予算も急速に加増された[9]。実業学校令が施行された明治 32 年以後は教育課程も安定し、教職員数も増加している。大正末期までを平均すれば 31 人程度の教職員がいた。各専攻別にみると絵画科 8 人、図案科 6 人、彫刻科 2 人、漆工科 2 人、学科 10 人程度で推移しており、これに書記 1～2 人、校医 1 人、校長 1 人が加わることになる。修業年限が 5 カ年に復した大正 13 年に改正された校則では生徒定員が 280 名と定められているので、当時の学校の規模が把握できる。昭和期になると図案科と建築科の増員もあって教職員数は若干の増加を見せる[10]。

２．校長・校医・書記・配属将校

京都市美術学校以後新制高等学校となるまでの校長または学校代表者の変遷は付表のとおりである。美術学校から美術工芸学校時代の校長は、はじめ産業界から内貴甚三郎（1848-1926）を招き、実業教育への方向転換を強く打ち出す人事を行ったが、一年後京都市職員の上田正當が後継し実務的路線を採った。一時東京美術学校の教授であった今泉雄作（1850-1931）の招聘を行ったのは、ちょうど国の補助金を受けるべく運動をしていた時期で、東京美術学校と密接な関係を持っていた特殊な事情がある。上田は 10 年以上校長を務め、今泉が校長を務めた期間、校長を退いた上田が学科の教諭を務めることもあった。

明治 42 年絵画専門学校が開校した後は、絵画専門学校の校長が美術工芸学校の校長も兼務するようになり、心理学者の松本亦太郎（1865-1943）が最初の両校校長となった。以後、学者か画家が校長を務めることになり、校長の人事に方針が立てられたと思われる。事務が一体化した両校において絵画専門学校が主導的立場を得たため、美術工芸学校における実業教育とは別に専門家養成のための高度な絵画教育の役割が大きくなった。ドイツ文学者の藤代禎輔（1868-1927）は 8 年以上も校長を務めるが、竹内栖鳳ら実技教員との対立から辞職することになり、絵専騒動として市中の話題となった[11]。画家として校長を務めたのは都路華香、菊池契月、西山翠嶂、川村曼舟であり、華香、曼舟は共に 7 年前後と長期間在任している。彼らは竹内栖鳳または山元春挙の弟子筋の画家であるため四条派に連なっており、絵画専門学校の絵画教育の方向性を象徴する人事といえる。校長選任の中継ぎにあたる期間については行政の幹部が事務取扱となることが普通であった。最後の校長となった中井宗太郎（1879-1966）は絵画専門学校の開校以来、教員として多くの学生に影響を与えた美学者である。大戦末期から戦後にかけて美術専門学校の校長と美術高等学校の校長事務取扱及び美術中学校の校長も務めている。

学校に校医が置かれるようになるのは明治 31 年 6 月の星野元彦（任期 M31.6～M40.3）からである。同年 1 月に公布された「公立学校ニ学校医ヲ置クノ件」を受けた措置であり、以後木村得善（任期 M40.3～M42.3）、渡辺豊治（任期 M44.7～M44.9）、竹内薫兵（任期 M44.9～T1.9）、瀬川深（任期 T1.10～T2.12）、楢林篤三（任期 T3.1～T4.3）、森家五郎（任期 T4.4～S9.10）、宇佐玄雄（任期 S9.10～S24）と続いている。昭和 6 年からはこれに加えて学校歯科医として橋田雅人（任期 S6.4～S20.7）、柏井郁三郎（任期 S20.8～?）が依嘱を受けている。

付表　京都市美術学校以後学校代表者一覧

吉田秀穀	京都府画学校校長	1886/3/22	1889/12/16	役人
	京都市画学校校長	1889/12/17	1891/03/31	
	京都市美術学校庶務幹理	1891/04/01	1893/03/31	
内貴甚三郎	京都市美術学校摂理	1893/04/21	1894/05/24	実業家
上田正當	京都市美術学校摂理	1894/05/24	1894/08/07	役人
	京都市美術工芸学校摂理	1894/08/08	1894/10/17	
今泉雄作	京都市美術工芸学校校長	1894/10/17	1898/01/31	学者
上田正當	京都市美術工芸学校校長代理	1898/03/01	1898/07/26	役人
	京都市美術工芸学校校長	1898/07/27	1901/5/7	
	京都市立美術工芸学校校長	1901/5/8	1908/11/18	
荒木矩	京都市立美術工芸学校校長事務取扱	1908/12/21	1909/3/31	学者
大野盛郁	京都市立美術工芸学校・京都絵画専門学校校長事務取扱	1909/4/1	1910/3/16	役人
松本亦太郎	京都市立美術工芸学校・京都絵画専門学校校長	1910/3/17	1915/5/29	学者
大森吉五郎	京都市立美術工芸学校・京都絵画専門学校校長事務取扱	1915/6/1	1916/3/9	役人
藤代禎輔	京都市立美術工芸学校・京都絵画専門学校校長	1916/3/10	1924/5/31	学者
（荒木矩）	京都市立美術工芸学校・京都絵画専門学校校長事務取扱	1920/7/3	1921/4/7	学者
多久安信	京都市立美術工芸学校・京都絵画専門学校校長事務取扱	1924/5/31	1925/3/24	役人
辻宇之助(都路華香)	京都市立美術工芸学校・京都絵画専門学校校長心得	1925/3/25	1926/3/19	画家
	京都市立美術工芸学校・京都絵画専門学校校長	1926/3/20	1931/8/4	
菊池完爾(契月)	京都市立美術工芸学校・京都絵画専門学校校長事務取扱	1931/8/7	1932/2/14	画家
	京都市立美術工芸学校・京都絵画専門学校校長	1932/2/15	1933/6/10	
西山卯三郎(翠嶂)	京都市立美術工芸学校・京都絵画専門学校校長	1933/6/10	1936/1/31	画家
石川芳太郎	京都市立美術工芸学校・京都絵画専門学校校長事務取扱	1936/1/31	1936/3/20	役人
川村萬蔵(曼舟)	京都市立美術工芸学校・京都絵画専門学校校長事務取扱	1936/3/20	1936/6/19	画家
	京都市立美術工芸学校・京都絵画専門学校校長	1936/6/20	1942/11/7	
大石有一	京都市立美術工芸学校・京都絵画専門学校校長事務取扱	1942/11/7	1942/12/28	役人
中井宗太郎	京都市立美術工芸学校・京都絵画専門学校／京都市立美術専門学校校長	1942/12/28	1949/4/15	学者

※朱文字は校長就任者

事務職員としては書記が置かれた。京都市との関係など事務体制に不明な部分はあるが、概ね 1～2 名が配置されていたらしく、絵画専門学校が生まれてからは両校書記を兼務する者が多かった。一部に学校教員との兼務や教員からの異動を見せる者がいる。美術学校から美術高等学校に至るまでの間に書記として確認できるのは、深谷省之助、竹内雅隆、富永元熙、野村成之、宮本鋹太郎、山田得多、種田貞一、池邊熊吉、東房長、青山元善、鈴鹿勝近、西海福之助（教員兼務）、尾木新太郎、高島乙助、河上英明、和沢平三郎、木村重次郎（教員兼務）、堀十五郎（元教員）、前田喜市（元教員）、平松宇吉、寺田功、川村廣光、辻久吉、石田信雄、藤堂頼菊、吉田喜一郎、奥田三郎、細川成一、宇都宮八藏の 29 名である。

大正 14 年からは「陸軍現役将校学校配属令」の公布により教練の指導のために陸軍将校が赴任するようになる。配属将校としては、市来政清（任期 T14.7～S3.3）、上田清勝（任期 S3.3～S6.8）、遠山勝雄（任期 S6.8～S7.8）、横山伊三郎（任期 S7.8～S8.8）、武市長雄（任期 S8.8～S10.8）、松島唯雄（任期 S10.8～?）、小田嶋俊夫（任期?～S13.4）、肥田鎮夫（任期 S13.4～S13.9）、熊本克巳（任期 S13.9～S14.1）、長谷川清太郎（任期 S14.1～S15.8）、辻忠三郎（任期 S15.8～S16.8）、東田篤二（任期 S16.10～?）の名が確認できる。遠山までは美術工芸学校専従として配属されたが、横山からは美術工芸学校・絵画専門学校両校に対し１名の配属となる。戦争末期には東田を最後に美術工芸学校への配属が見られなくなる。

３．絵画科の教員

絵画科の教員は画学校が母体であるだけに人数も 53 名と多く、入れ替わりもかなりめまぐるしい。京都市美術学校時代は原在泉（1849-1916）、鈴木瑞彦（1848-1901）、榊原文翠（1824-1909）、岸九岳（1845-1921）、森川曽文（1847-1902）ら概ね画学校時代を継承した顔ぶれである。原派、岸派、四条派、大和絵派と比較的幅広い範囲の画系が連なっているといえる。

明治 27 年からはじまる美術工芸学校の時代になると、幸野楳嶺の弟子竹内栖鳳（1864-1942）、菊池芳文（1862-1918）が新たに加わる。明治 30 年になると曽文の弟子三宅呉暁（1864-1919）が着任するのをはじめとして、翌 31 年から 35 年にかけて非常に多くの教員が入れ替わりながら任命される。明治 31 年に着任した 7 名の中には芳文の弟子川北霞峰（1875-1940）、合田一蜂のようにその後長く教育に関わる者もいた。特に霞峰は昭和 5 年まで教員を務め、在職期間の最も長い教員となる画家である。

「実業学校令」の施行にともない校則が改正された明治 32 年には森寛斎の弟子山元春挙（1871-1933）が着任する。このころには美術学校時代の教員は大半が退任しており、明治 35 年に西山翠嶂（1881-1958）、川村曼舟（1880-1942）が着任して主要な教員の交代を終えている。明治 31 年頃から着任した教員の顔ぶれをみると特徴的なのが美術工芸学校の卒業生が教員として学校に戻る例が増している点であろう。絵画科として最も早いのは明治 31 年に任じられた兼崎得山、滝山広太郎、渡辺虚舟であるが、先に述べた一蜂、霞峰、翠嶂も同様に卒業生である。このように、卒業生が学校の教育を担いはじめる背景には、明治 26 年に御所東南隅に初めての自前の校舎を獲得し、安定した教育環境を得たことが大きい。さらに、明治 27 年から国の補助金を得て教育体制の整備が可能となったことも重要な要素となっている。ちょうどこの時期に教員による絵手本画が多数制作されており、運筆手本から習作手本へと教育資料の性質が変化することから、環境の変化を背景に絵画教育の新たな方針が立てられたことがうかがえる。教員の体制も最大 11 名とかなり手厚いものとなっている。

明治 42 年には絵画専門学校の開校にともない栖鳳、翠嶂、一蜂、芳文、春挙が絵画専門学校に異動する。ただし、芳文、春挙はその後も美術工芸学校教諭を兼任した。後任として西村五雲（1877-1938）と菊池契月（1879-1955）が着任するが、菊池契月はまもなく絵画専門学校に移り、明治 40 年から着任している柴原希祥（1885-1954）を含む新体制となった。絵画専門学校が生まれたため、美術工芸学校の教員から絵画専門学校へ移る例がその後もしばしば見られ、絵画科の教育体制が絵画専門学校の影響を受けるようになる。その後着任した徳田隣斎（1880-1947）、木島桜谷（1877-1938）、都路華香（1870-1931）にしても、桜谷は 3 年で絵画専門学校に異動、隣斎もその後絵画専門学校との兼職を命じられる。この頃から教員に楳嶺門下あるいはその師系に連なる画家が増す。

校則改正が行われる大正 13 年には絵画専門学校で絵専騒動があり、その余波を受けて美術工芸学

校でも教員の交代があった。五雲と華香が絵画専門学校に異動し、中村大三郎（1898-1947）、案本一洋（1893-1952）が着任するが、大三郎もまもなく絵画専門学校に異動した。大正 11 年には曼舟も絵画専門学校に異動しており、曼舟と入れ替わるように佐野一星（1894-?）、二宮一鳩（1888-?）、柴田晩葉（1885-1942）が着任した。すなわち、大正 13 年以後は川北霞峰、徳田隣斎、柴原希祥といった明治末期に着任した古参に、一星、一鳩、晩葉といった新参教員を加えて軸となし、新たに案本一洋、宇田荻邨（1896-1980）、川本参江、山口華楊（1899-1984）を補充して、人数を確保した。昭和 5 年に案本一洋を除く教員は美術工芸学校を退き、華楊のみが絵画専門学校に異動している。大規模な交代の理由を明確にする資料は未見だが、同年京都市から美術工芸学校教育内容改善の通達が出ていることに関係して何らかの改編が行われたことがわかっており[12]、人事刷新に至ったものと思われる。この時期嘱託教員が増加する特徴が有る。

昭和 5 年に新たに着任したのは登内微笑（1891-1964）、堂本印象（1891-1975）、前田荻邨（1895-1947）、金島桂華（1892-1974）、松元道夫（1896-1990）の 5 名である。ややおくれて上村松篁（1902-2001）、都路華明（1903-1965）が加わり、一洋を加えた 8 名の体制が昭和 11 年まで継続する。昭和 11 年には一洋、印象、道夫、松篁の 4 名が絵画専門学校に異動、猪原大華（1897-1980）、菊池隆志（1911-1982）、西村卓三（1908-1955）、徳岡神泉（1896-1972）、勝田哲（1896-1980）、入江波光（1887-1948）の 6 名が任命され増員を見ている。昭和 10 年に松田文相による帝展改組が行われ、その影響が校長西山翠嶂の辞任と絵画専門学校教員 3 名[13]の退任に表れ、美術工芸学校の人事にも影響したのである。特に、美術工芸学校教員を務めたことのない波光が、絵画専門学校の専従教員から美術工芸学校教諭の兼任を命じられているのは、美術工芸学校教育の体制強化を意図したのであろう。この昭和 11 年体制が若干の教員の交代をみながらも、昭和 23 年の新制高校改組まで継続することになる。一部教員の交代は昭和 15 年前後に行われ、隆志、荻邨、桂華、神泉が退任し、小宮大宙（1907-?）、多田敬一（1900-1981）、田ノ口青晃（1897-?）、高木冨三（1908-2000）が加わる。戦時下の混乱した状況を考えれば、10 名前後の教員が名を連ねた手厚い体制がとられている。

以上のような美術工芸学校絵画科の教員体制の変遷をまとめるなら、次の六期に分けることができる。その期間に在籍した特徴的な教員の名を着けて区分とした。

明治 27 年～31 年　　瑞彦時代

瑞彦、文翠らによる京都市美術学校の体制を継承しつつ新進作家の栖鳳と芳文が加わり四条派の教員の厚みが増す。新校舎を得て教育体制の基礎を整えた時期。

明治 31 年～42 年　　栖鳳時代

栖鳳と芳文に春挙、呉暁が加わり、四条派の教員が教授の主流となる。教員の数も多く充実する。併せて教員の海外渡航により西洋美術への視野が拡大した展開期で、新しい絵手本が制作された。

明治 42 年～大正 13 年　五雲時代

教育の主導的立場が絵画専門学校に移り、中核となる教員が同校に異動して、美術工芸学校の教育は再構築される。華香や五雲が学校教育に加わり媒嶺門下に連なる画家の厚みが増しはじめる。

大正 13 年～昭和 5 年　荻邨時代

霞峰や希祥ら長く教員を務める教員の存在により教育は安定するが、五雲や華香ら有力教員の絵画専門学校への異動などにより、体制は弱体化する。これを補うため荻邨や大三郎が着任するが、やがて彼らも絵画専門学校に異動して、美術工芸学校の教員層が薄くなる。

昭和 5 年～11 年　　印象時代

従来の教員の大半が退陣し、印象や桂華ら楳嶺門下の流れを受ける複数の中堅画家と交代する。学校には戦時体制の影響が表れはじめるが、ほぼ固定した教員体制が作られる。

昭和 11 年～23 年　　波光時代

松田改祖の影響により美術工芸学校教員の絵画専門学校への大量異動があり、栖鳳の弟子筋にあたる大華や神泉らの中堅画家により補充された。絵画専門学校専任であった波光を兼任として教育体制を補った。

４．工芸図案科、図案科の教員

25 名が工芸図案科あるいは図案科の教員を務めたと考えられるが、工芸図案科が生まれた当初の教育体制は脆弱であった。工芸図案科の教員として最初に着任したのは図案家の竹内泰蔵だが、明治 21 年に専攻が生まれてすでに 3 年を経た明治 24 年のことである。それも翌年洋画家の大澤芳太郎と交代しているところから、当初の教育は絵画科の教員が関わっていた可能性が高い。絵画科担当となっている岸九岳の退任時に入れ替わるように工芸図案科教員を任じられたのが画家の谷口香嶠（1864-1915）であるところから、岸九岳が工芸図案科に関わっていた可能性がある。香嶠は以後長く図案科専従教員の中心となるが、大澤退任後になると香嶠の他は伴虎三郎ひとりという工芸図案科の教育体制は寂寂たるものであった。ただ、大澤が教員側のまとめ役となる幹事を兼務していることから、図案科に対する期待は存在していたと考える。

図案教育の陣容が大きく変化するのは明治 33 年である。前年校則が改正され教育課程が大きく変更されたことと、市の図案調製所が美術工芸学校の所管に移され図案調製部となったことがその契機となった。図案調製部の技師として神坂雪佳（1866-1942）が、同技手として古谷紅鱗（1875-1910）、猪飼嘯谷（1881-1939）が新たに着任した。彼らは教員ではなかったが、彼らの活動が学校に意識改革をもたらしたと考える。この頃、技手ながら再任となる竹内泰蔵のほか菊地左馬太郎、藤井春水、麻生珠溪らが嘱託教員に任じられており、ただひとりの図案科教員となっていた香嶠を補佐する体制が作られた。やがて、明治 38 年に図案調製部の職員が図案科教員となると、谷口香嶠の弟子にあたる岐美竹涯（朝山清）（1878-1939）も教員に加わり、専任教員 5 人で、図案科教育を担当する体制が整備された。神坂の薫陶を受けた紅鱗が若くして亡くなり、その後任として、嘯谷と同様に香嶠の弟子にあたる伊吹蘚石（青木幸治郎）が教員となった。この頃は、画家が図案教育の中心となっており。有職文様など古典に学ぶことが重視された。

そして明治 44 年に千熊章禄（1883-1965）が着任した。千熊は美術工芸学校の図案科を卒業したのち東京美術学校図案科に進み、卒業している。東京と京都において幅広い図案教育を兼修し、その後長く美術工芸学校図案科の教員を務めことになる。この千熊の着任の翌年、入れ替わるように香嶠が退任したことは、絵画教育から図案教育への変化を予感させて象徴的である。

大正 14 年には、大きな教育体制の変化があった。神坂が退任し、その半年後に日本画家である猪飼、岐美、伊吹の 3 教員が退任するのである。神坂の後任は美術工芸学校図案科卒業生の図案家大橋

聿が任じられたが、日本画家たちの後を受けたのは、田村春暁、山鹿清華（1885-1981）、山田江秀（1889-?）ら３名の染織家と日本画家森守明（1892-1951）であった。そして、すでに繪画専門学校で素描の担当をしていた太田喜二郎（1883-1951）が嘱託教員として兼任教員となり、絵画教育の中に洋画の要素が加わるようになる。京都市画学校で明治 23 年に西洋画教育が廃されて以来、四半世紀ぶりに中等教育における洋画教育が復すことになる。千熊とともに７名の陣容となり、従前の日本画家主導の編成から、図案家工芸家中心の編成に変化したのである。ここに前年に起こった絵専騒動の影響があるのかは不明である。図案教育を行う５人の教員に２名の絵画実習教員を加えた編成とみられ、日本画家の教員が退任したことから森が着任し、洋画と日本画を絵画実習の２本柱として増員をみたのである。大正 12 年の校則改正で修学年限が５年に延びたことも、増員圧力になったかもしれない。昭和 14 年まで、概ねこの体制が採られたが、同年大橋が絵画専門学校の教員として異動し、その後任には工芸史家の片山行雄が着任、翌年卒業生の丸毛又三郎（1912-?）が図案家として加わった。昭和 16 年に森が退任した後、日本画家の後任はなかったが、一方で昭和 17 年に太田の他に洋画家の新井完（1885-1964）を加えて、洋画教育に対する手当を厚くした。洋画に対する需要が大きくなったことが考えられる。

終戦も近い昭和 19 年から 20 年にかけて、山田、山鹿、千熊が相次いで退任しており、大正 14 年以来の体制が終焉を迎える。その後任としてそれぞれ中川貞吉（1900-?）、笠間嘉一郎（1919-?）、井上三郎が着任した。中川は京都高等工芸学校出身の技術者であり、笠間、井上は図案科の卒業生であったが、笠間は洋画も描いた。戦後の昭和 22 年には太田、新井、片山が絵画専門学校から改称した美術専門学校の専従となり、逆に大橋聿が美術工芸学校に異動した。教員は大橋、田村、中川、笠間、井上の５人となり、昭和 23 年の新制高等学校改組を迎える。

５．彫刻科の教員

彫刻科は東京美術学校を卒業した大村西崖（1868-1927）によって基礎が作られた。それを継承したのが同じく東京美術学校出身の林美雲（1862-1912）である。このように美術工芸学校の彫刻科は東京美術学校の木彫教育を継承する形で始まった。林の後を受けた亀田徳太郎（1870-1929）も東京美術学校の卒業生だが、亀田在任中の明治 32 年に美術工芸学校の彫刻科卒業生である國安稲香（1872-?）が教員となり、美術工芸学校出身者が教育に加わった。以後概ね彫刻科教員は二人体制となる。國安は昭和６年まで教員を続けその中核を担った。以後、船津亨、上野守三（1885-?）、矢野判三（1898-1991）、北村西望（1884-1987）、建畠大夢（1880-1942）、石本暁海（1888-1935）、藤庭賢一（1919-1988）と彫刻科の卒業生が教員として後進の指導にあたった。特に北村、建畠、藤庭は美術工芸学校卒業後、東京美術学校に進んでおり、彫刻科における美術工芸学校と東京美術学校の近しい関係をうかがわせる。こうした関係は昭和 10 年に東京美術学校卒業の松田尚之（1898-1995）を教員に迎えることにつながっている。また、絵画専門学校の教員で美術工芸学校を兼務した太田喜二郎が図案科のみならず彫刻科の素描の指導にもあたったことが伝えられている[14]。

美術工芸学校の彫刻教育は、最初は東京美術学校に倣い木彫に始まったと考えられる。その目的は彫刻家育成にあり、実学的要素はなかった。やがて、國安の時代には塑造が行われるようになる[15]。東京美術学校でも明治 32 年に塑造科が新設されているが、当時東京においても新興の技法であった塑造に対して國安が接近した経緯は明らかではない。大村は美術工芸学校時代から塑造の利を説いており、國安も大村の講義を受けていた。東京美術学校に復帰した大村の動向が亀田を経て導入されたものと考えてよいのだろう[16]。昭和戦前期には矢野判三、北村西望、建畠大夢、松田尚之ら塑造を主体と

する作家に教員が占められ、時代の変化を見せる。全部で 14 名が教員となっていた。

６．漆工科、描金科、蒔絵科の教員

漆工科は京都の蒔絵師湯浅久吉（1843-1901）が最初の教員となり、まもなく東京美術学校で教員を務めた伊藤貞文（1853-1917）が教員に加わる。京都の伝統に江戸漆器の流れを取り入れたことになるが、これは東京美術学校の教育を移植するところに目的があったと考えてよい。従って、教育の目的は職人の養成ではなく工芸家の育成にあった。伊藤は 3 年後漆工科の立ち上げが終わると退任し、東京美術学校漆工科出身の国重篤介がその欠を補った。湯浅も 7 年間教員を務め、漆工科の運営がある程度安定を見ると、京都の蒔絵師富田幸七（1854-1910）を後任として退いている。明治 42 年までは京都と東京の蒔絵師が教育にあたっていた。

国重退任後は、美術工芸学校卒業の岩村光真（1885-1945）が着任し、在職中に亡くなった富田幸七の後任となる富田誠（1873-1944）とともに、京都の蒔絵師２人が教員を務める体制となった。岩村、両富田体制は 8 年間、大正 5 年に富田誠が京都の江馬長閑（1881-1940）に交代してから続く岩村、江馬体制は 14 年間、昭和 5 年から交代した平舘嘉邦（1897-1981）、奥村霞城（1893-1937）体制は 7 年間続く。平舘、奥村とも美術工芸学校を卒業した蒔絵師だが、奥村は東京の船橋舟珉にも師事しており、特に京都への純化が進んだとみるべきではない。漆工科の廃止が決まった昭和 13 年から教員が１人に減員され、終戦までは平舘が、終戦後は卒業生で迎田秋悦の弟子水内杏平（1909-2001）と奥村の弟子平石晃祥（1910-1989）が新制高校への改組まで勤めている。漆工科は蒔絵部と髹漆部の二部で構成されたが、教員を務めたのは東京、京都とも蒔絵師が多く、京都の教員は山本利兵衛家の系譜に連なる者が多い。全部で 11 名が教員となっている。

７．学科教員

学科については、明治 21 年の校則改正を受けて数学や理科といった科目が設けられたものの当初教員の配置は１名程度と少なく、京都市に移管された後も状況は変わっていない。美術学校になるとわずかに教員数は増すが、学科教員の体制が本格的に整備されはじめるのは明治 32 年の実業学校令施行にともなう校則改正以後といってよい。

美術学校の最初の学科教員として数学担当の嘱託教員である末広虎之助が着任している。末広は明治 19 年に画学校東宗を卒業しており、画学校卒業生が学校の教員として戻る最初の事例となっている。明治 27 年以後は学科の科目が増加し、教員の数も増加する。このころ修身の教員として文人の富岡鉄斎が着任、明治 37 年まで務める。また、儒学者で本草学者であった山本溪愚（1827-1903）も鉄斎とともに着任し、2 年ほど教員を務めている。

明治 32 年から科目編成が変わると、科目担当が定められるようになったと思われる。教員数も時期により増減はあるが、おおむね 10 名程度が授業を行った。大正初期までは嘱託教員の占める割合が高かったが大正昭和期では専任教員の割合が遙かに多くなる。全体として学科教員の数は増加傾向であり安定化を見せたといえる。科目が多数あるため、99 名が教員を務めている。

明治 33 年に教員となった荒木矩（1865-1941）は漢文、作文、歴史、美術史、工芸史と幅広い科目を担当し、明治 41～2 年には校長事務取扱を務めている。早くから絵画専門学校の教員を兼務しており、美術工芸学校の教員を大正 6 年まで務めた後、絵画専門学校に異動している。初期の文系科目の中心的存在であった。また同じ明治 33 年には堀十五郎も着任しており、数学や理科など理系科目の中

核を担って大正 15 年まで務めている。そして大正 4 年から同 13 年まで歴史地理の教員を務めたのが江馬務（1884-1979）である。江馬は学校における故実研究の中心人物のひとりで明治末期に嘱託教授を務めたこともあった。この三名は大正期までの学科教員を代表する者であろう。

大正昭和期の学科教員のうち最も在職期間が長いのは、明治 44 年に教員となり昭和 20 年まで務めた平野久吉（1882-1946）である。国語漢文の担当であった。全般に、長期間在職して学科の核となる人物は少なく、先に挙げた者の他、作文習字の西海福之助、社会科全般の野口寛治（1891-?）、理科の松本収、英語の中島梯次、高畑彦九郎らは比較的長く教鞭を執っている。実業学校ではあったが英語教育は重視していた。

他に、実技関連の座学として行われた専門科目があった。図学、美術解剖、図案法、美術工芸史、建築沿革、漆器製造法などがその例である。学科の中でも専門科目については嘱託教員や実技教員が担当することが多かったが、解剖学については、明治 41 年に着任した八木絹助（1870-?）が大正 15 年まで長期にわたり担当し、その後任となる千野光茂（1888-?）も他の理系科目とともにこれを担当して大正 15 年から昭和 20 年まで務めている。美術解剖は比較的早くから科目に取り入れられており[17]、一貫して専任教員が担当している。昭和初期に図学を担当した久世欽十郎も嘱託教員ながら 11 年間教員を務めている。また、修身とともに必修となっていた体操については明治 33 年に着任した松田清太郎以降、明治 36 年に教員となった前田喜市に至るまで専任教員が配置されている。特に前田は、一時応召により不在の期間はあるものの昭和 6 年まで務めており、在職期間の長い教員の一人である。

嘱託教員の中で、注目すべき教員としては、日本画家ながら西洋美学に詳しい徳永鶴泉（1871-?）は明治 34 から 40 年まで西洋美術史を、美学者で俳人の中川四明（1849-1917）は明治 33 年から 42 年まで美学を、建築家の松室重光（1873-1937）は明治 34 年から 37 年まで建築史を、有職故実に詳しい華族の山科言縄（1835-1916）は明治 33 年から 38 年まで故実を、儒学者の苅谷無隠（1844-1910）は明治 35 年から 39 まで漢文を、日本美術史家の源豊宗（1895-2001）は大正 14 年から昭和 6 年まで歴史を担当した。美術評論家加藤一雄（1905-1980）も昭和 9 年から 16 年まで歴史地理の教員を務め、美術高校期にも嘱託教員を務めるなど、教育に貢献した。全体としてみれば、嘱託教員が多かった明治 30 年代に、多士済々の陣容を見せており、生徒の学問を刺激した様子がうかがえる。

８．その他の専攻の教員

その他設置された学科で、専任の教員を置いたのは、明治 27 年に設置され同 32 年に廃止された予備科と、昭和 19 年に設置され戦後新制の美術高校へ継承された建築科である。

予備科は初学者に対し、実技と教養教育を組み合わせて 1～2 年の短期間で学ぶ速成科として設置された。画学校末期に工芸図案科に設置された速成科にあたる制度といえる[18]。専任として最初に配置されたのは日本画家横山大観（1868-1958）である。東京美術学校絵画科の第一回卒業生である大観は、明治 28 年から翌年まで助教諭を務め同 31 年まで嘱託として在籍した。大観が助教諭を退任した際、その後任となったのは、同じ東京美術学校を卒業した小島光眞（独山）（1868-1941）である。小島は東京美術学校図画教員課程に学んでおり、明治 27 年同校絵画科の第二回卒業生となった。両者とも大村西崖同様に東京美術学校と美術工芸学校との親しい関係を物語る。予備科の入学者が増加したため、教師の増員がはかられ、師範学校出の佐藤崇夫（1853-1898）が着任し、2 年半ほど小島を助けた。

建築科の設置は戦争末期に突然に行われており、学校内で協議した形跡はない。その教育は建築士養成の実務的カリキュラムであり、1 学年 50 人とかなり多くの生徒を募集しているところから、政策

として行われたものと思われる[19]。青山正義、片山彬が昭和 19 年に着任し、翌年には北野重利、前田良三がこれに加わった。確認できないが、当時着任した野々村五四男（1910-?）、南廣吉（1906-?）も建築科の教員であった可能性がある。

９．おわりに

明治 13 年京都府画学校が開校したものの、府下の産業界や行政側が期待した学校像は実現しなかった。そこで、図案教育の充実を柱とし、中等教育の中で国の実業教育政策に対応した体制を作り出したのが美術工芸学校である。この方針は産業界との連携を強くすることで、学校の経営基盤を安定させるものであったが､実業教育と直接の関係がない絵画教育を安定して行うためにも有益であった。また、こうした学校の教育機関としての安定が、彫刻と漆工の専門家養成という限定された需要に対する事業を行う基盤となったことも看過できない。実業教育が主導する美術工芸学校であったが、上級学校として絵画専門学校ができると､学校の教育方針は絵画の専門家教育に軸足を置くようになり、図案教育の役割は多少影を潜めることになった。しかし、依然として需要の高かった実業教育は、中等教育として戦後新制高校へ改編されるまで、産業界との結びつきの中で十分に教育成果をあげている。

美術工芸学校の教育に携わる教職員の変遷を見ると、学校の方針が如実に反映していることがわかる。彼らの構成を見ると、絵画科においては、四条派の台頭を背景に、幸野楳嶺の弟子筋にあたる画家の着任が多く、絵画専門学校との異動の問題も含めて、絵画教育の主流となる師系が形成されていることを伝えている。また、図案科においては、絵画教育から工芸図案教育への転換が明確な人材の選択によって実施されていること、洋画教育への回帰が図られていることが注目される。そして、非常に生徒の少ない専攻ながら、東京美術学校との関係の中で生まれた彫刻科、漆工科が、人的交流やカリキュラムの継承により、両校の関係性をその後も伝えていることも確かめることができる。どの専攻においても、卒業生が再び教員として学校に戻ることによって教育の継承が行われている点は興味深く、学科教員に個性的な人材の登用が見られることと同様に注目すべき点である。

『百年史』に収録された「教員在職一覧表」を整理し、わかりやすくすることが目的ではあったが、残された記録は決して十分とはいえない｡今日その経歴すら不明な者は多く､修正には限界があった。教育課程の変化については以前簡単にまとめたことがあるが[20]、教職員の体制は、考え方にすぎない教育課程を実体化する手段として重要な役割がある。京都市美術学校以後 60 年近い歴史を紡いだ美術工芸学校の教育を具体的に理解するために、時間軸の中で教職員の働きを把握することが必要と考える。

注

---

[1] 他に明治 27-32 年に予備科が、昭和 19-23 年に建築科が設置された。

[2] 『百年史』（1981 年 3 月、京都市立芸術大学）pp. 504-523。

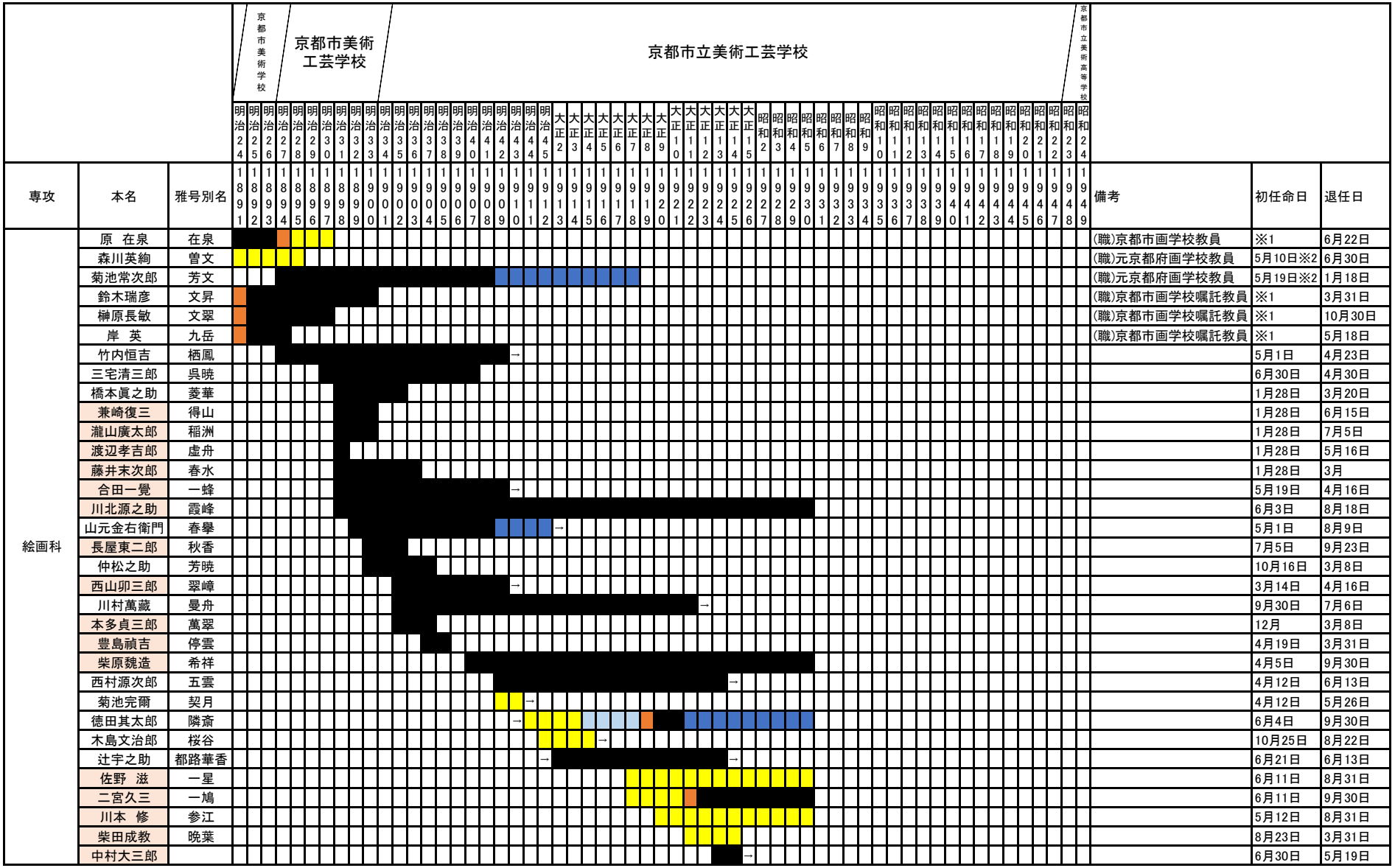
[3] 『百年史』（前掲書）を基本に「京都市美術工芸学校一覧」（明治 34 年 3 月）、「京都市立美術工芸学校一覧」（明治 35 年 3 月）、「京都市立美術工芸学校沿革略」（明治 43 年 3 月）、「京都市立美術工芸学校一覧　明治四十五年七月」（明治 45 年 7 月）、「美術工芸学校沿革材料」、「明治四十三年以後沿革史 京都市立美術工芸学校」、「旧職員履歴書綴」、「退職教員履歴書　第二冊」、「大正十四年四月任免辞令記録簿」、校友会誌「双葉」、などにより修正した。

[4] この他に仕丁、園丁、門衛、火夫を雇用していた記録があり、昭和期には図書係も置かれた。

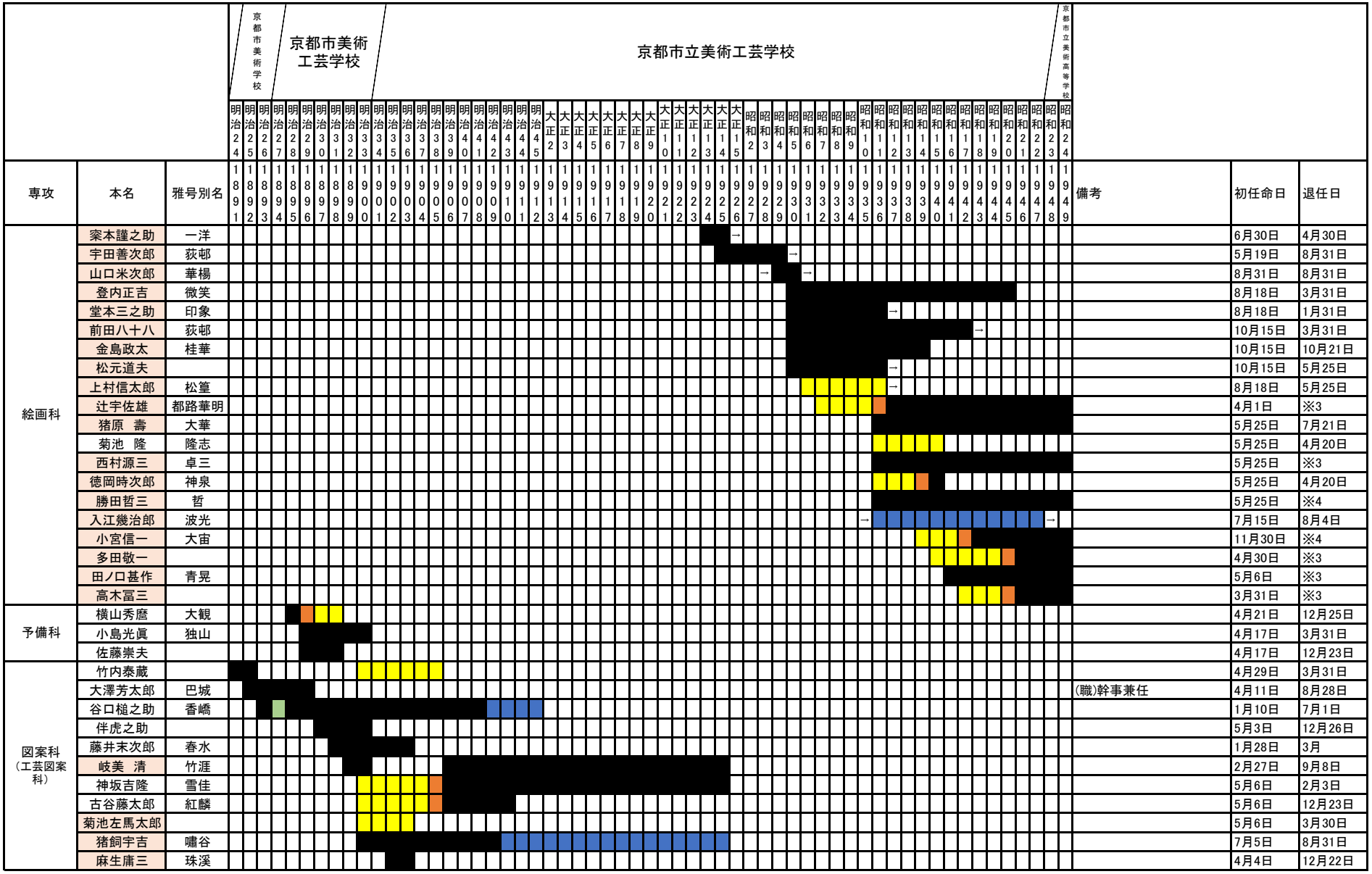
[5] 昭和 21 年 7 月から地方教官となる。

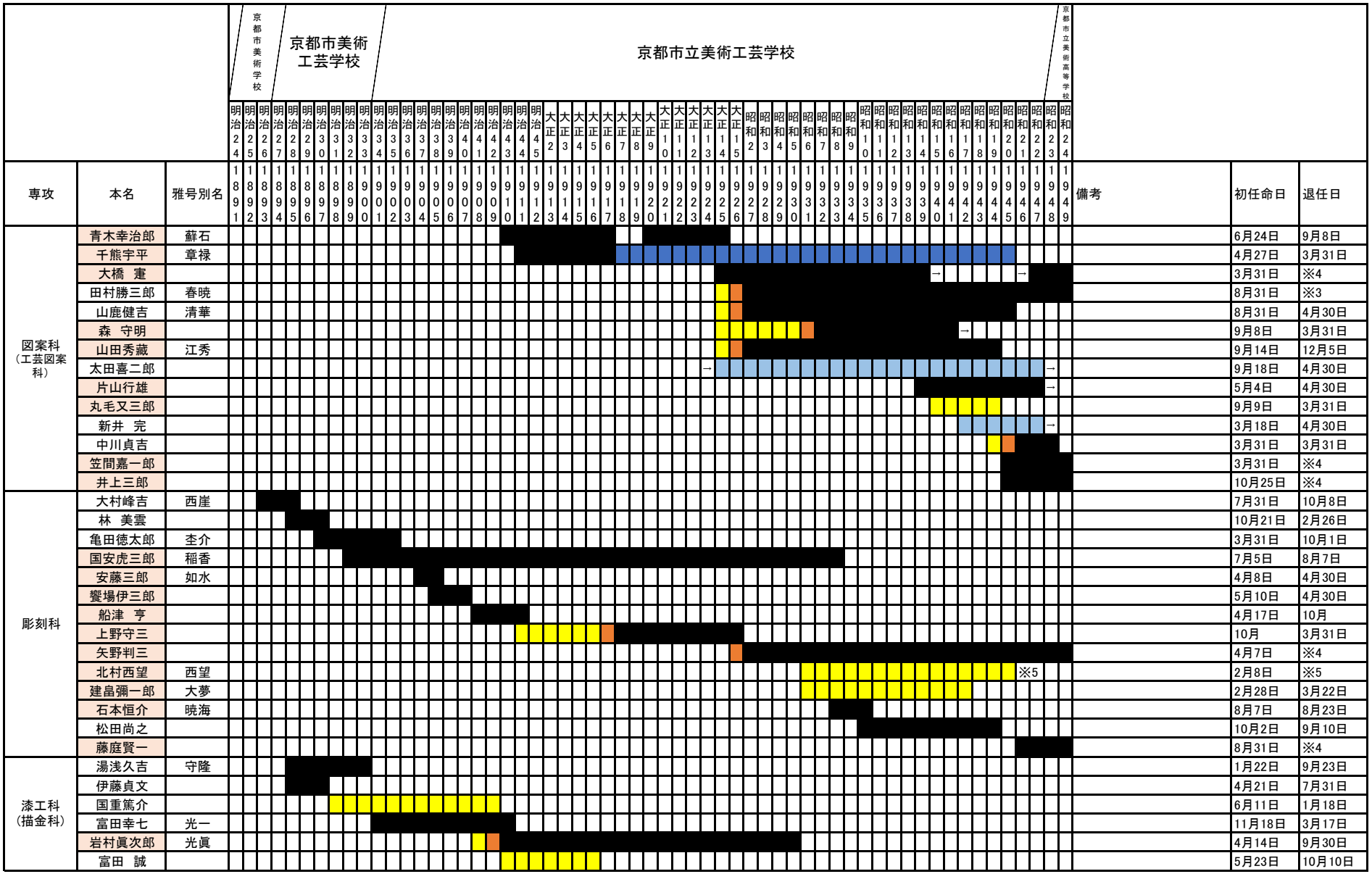
[6] 「沿革一覧表」(『京都市立美術工芸学校一覧』明治 45 年 7 月）p.6。明治 23 年の項。
[7] 明治 24 年 1 月には京都府勧業課からの補助金打ち切りにともない、学校存続についての審議が行われた。産業界からの希望を受けて存続が認められた。
[8] 明治 26 年御所東南隅の土地を借地し、初めて自前の校舎を京都市が建築した。
[9] 明治 27 年実業教育費国庫補助法が公布され、21 校が補助を受けた。美術学校の受けた 2500 円は該校中最高額である。当初の補助金額は学校予算の三割を占めた。そして、金額の変動はあったが、補助金は昭和初年まで受けることができた。補助金にともなって市費も増額されており、美術工芸学校が単独で存在した最終年次である明治 41 年の市費による予算規模は明治 27 年の 3.7 倍にもなっている。
[10] 大正 14 年から始まった配属将校 1 名について割愛した昭和期の教職員は 34 名程度で推移している。
[11] 大正 13 年 4 月に学校移転問題に端を発した校長藤代禎輔と教員竹内栖鳳、山元春挙との確執が、学校運営のあり方にまで及び学校全体を混乱させた。結局校長藤代と教員竹内、山元、荒木矩の双方の退任により収束させることになった。
[12] 「明治四十三年以後沿革史　京都市立美術工芸学校」の昭和 5 年 8 月 31 日の項に「教員山口米次郎学校編制ノ変更に依リ職務を免セラル」とある。この再編が絵画科のみのものであった可能性はあり、漆工科を除く専攻では、顕著な教員の交代は見られない。
[13] 菊池契月、川村曼舟、西村五雲の 3 名。
[14] 『百年史』（前掲書）p.277。
[15] 國安についてはその作品を確認できないが、國安のみが教員を務めていた明治末から大正初期の彫刻科の生徒作品（校友会誌『美』11･22･34･71 号）が塑像で制作されているため、國安自身の指導が彫塑にかかるものであったと思われる。
[16]『東京美術学校の歴史』(1977 年、日本文教出版）p. 113。『東京芸術大学百年史、東京美術学校篇第 1 巻』(1987 年、音楽之友社）pp. 352-358。
[17] 明治 25 年の京都市美術学校教則に美術解剖の科目があり、東京美術学校で明治 24 年から森鴎外が美術解剖の授業をはじめた直後のことである。『東京美術学校の歴史』(前掲書）pp. 85-8。『東京芸術大学百年史、東京美術学校篇第 1 巻』(前掲書）pp. 477-480。
[18] 予備科は本科より若くして入学できた。これは実業に携わる者の子弟が長く学校教育を受ける内に実業への興味を失う傾向にある対策として考えられたらしい。予備科設置当初は専攻とは無関係だったが、明治 29 年の校則改正では各専攻に予備科を設置するとしている。(「京都美術協会雑誌　43 号」1895 年 12 月、pp. 18-25)。
[19] 大正 13 年には市立洛陽高等学校にすでに建築科が設置されていた。市立美術工芸学校への設置は終戦直前の昭和 19 年で、戦後も教員を増やして増強している。おそらく当時の建築需要に応えるものであったと思われるが、市立美術高等学校に改組した後、明治 23 年に生徒は洛陽高等学校建築科に転校、美術高等学校建築科そのものは翌年日吉ヶ丘高等学校への併合時、市立伏見高等学校に分離移転している。
[20] 拙稿「京都市立美術工芸学校の教育課程」(並木誠士編『近代京都の美術工芸　制作・流通・鑑賞』2019 年 3 月、思文閣出版、pp.243-267)

別表　京都市美術学校～京都市立美術高等学校教員一覧



専攻	本名	雅号別名	備考	初任命日	退任日
絵画科	原　在泉	在泉	(職)京都市画学校教員	※1	6月22日
	森川英絢	曽文	(職)元京都府画学校教員	5月10日※2	6月30日
	菊池常次郎	芳文	(職)元京都府画学校教員	5月19日※2	1月18日
	鈴木瑞彦	文昇	(職)京都市画学校嘱託教員	※1	3月31日
	榊原長敏	文翠	(職)京都市画学校嘱託教員	※1	10月30日
	岸　英	九岳	(職)京都市画学校嘱託教員	※1	5月18日
	竹内恒吉	栖鳳		5月1日	4月23日
	三宅清三郎	呉暁		6月30日	4月30日
	橋本眞之助	菱華		1月28日	3月20日
	兼崎復三	得山		1月28日	6月15日
	瀧山廣太郎	稲洲		1月28日	7月5日
	渡辺孝吉郎	虚舟		1月28日	5月16日
	藤井末次郎	春水		1月28日	3月
	合田一覺	一蜂		5月19日	4月16日
	川北源之助	霞峰		6月3日	8月18日
	山元金右衛門	春擧		5月1日	8月9日
	長屋東二郎	秋香		7月5日	9月23日
	仲松之助	芳暁		10月16日	3月8日
	西山卯三郎	翠嶂		3月14日	4月16日
	川村萬藏	曼舟		9月30日	7月6日
	本多貞三郎	萬翠		12月	3月8日
	豊島禎吉	停雲		4月19日	3月31日
	柴原魏造	希祥		4月5日	9月30日
	西村源次郎	五雲		4月12日	6月13日
	菊池完爾	契月		4月12日	5月26日
	徳田其太郎	隣斎		6月4日	9月30日
	木島文治郎	桜谷		10月25日	8月22日
	辻宇之助	都路華香		6月21日	6月13日
	佐野　滋	一星		6月11日	8月31日
	二宮久三	一鳩		6月11日	9月30日
	川本　修	参江		5月12日	8月31日
	柴田成教	晩葉		8月23日	3月31日
	中村大三郎			6月30日	5月19日


京都市美術学校
京都市美術工芸学校
京都市立美術工芸学校
京都市立美術高等学校
専攻
本名
雅号別名
備考
初任命日
退任日
絵画科
予備科
図案科（工芸図案科）
6月30日 4月30日
5月19日 8月31日
8月31日 8月31日
8月18日 3月31日
8月18日 1月31日
10月15日 3月31日
10月15日 10月21日
10月15日 5月25日
8月18日 5月25日
4月1日 ※3
5月25日 7月21日
5月25日 4月20日
5月25日 ※3
5月25日 4月20日
5月25日 ※4
7月15日 8月4日
11月30日 ※4
4月30日 ※3
5月6日 ※3
3月31日 ※3
4月21日 12月25日
4月17日 3月31日
4月17日 12月23日
4月29日 3月31日
(職)幹事兼任 4月11日 8月28日
1月10日 7月1日
5月3日 12月26日
1月28日 3月
2月27日 9月8日
5月6日 2月3日
5月6日 12月23日
5月6日 3月30日
7月5日 8月31日
4月4日 12月22日

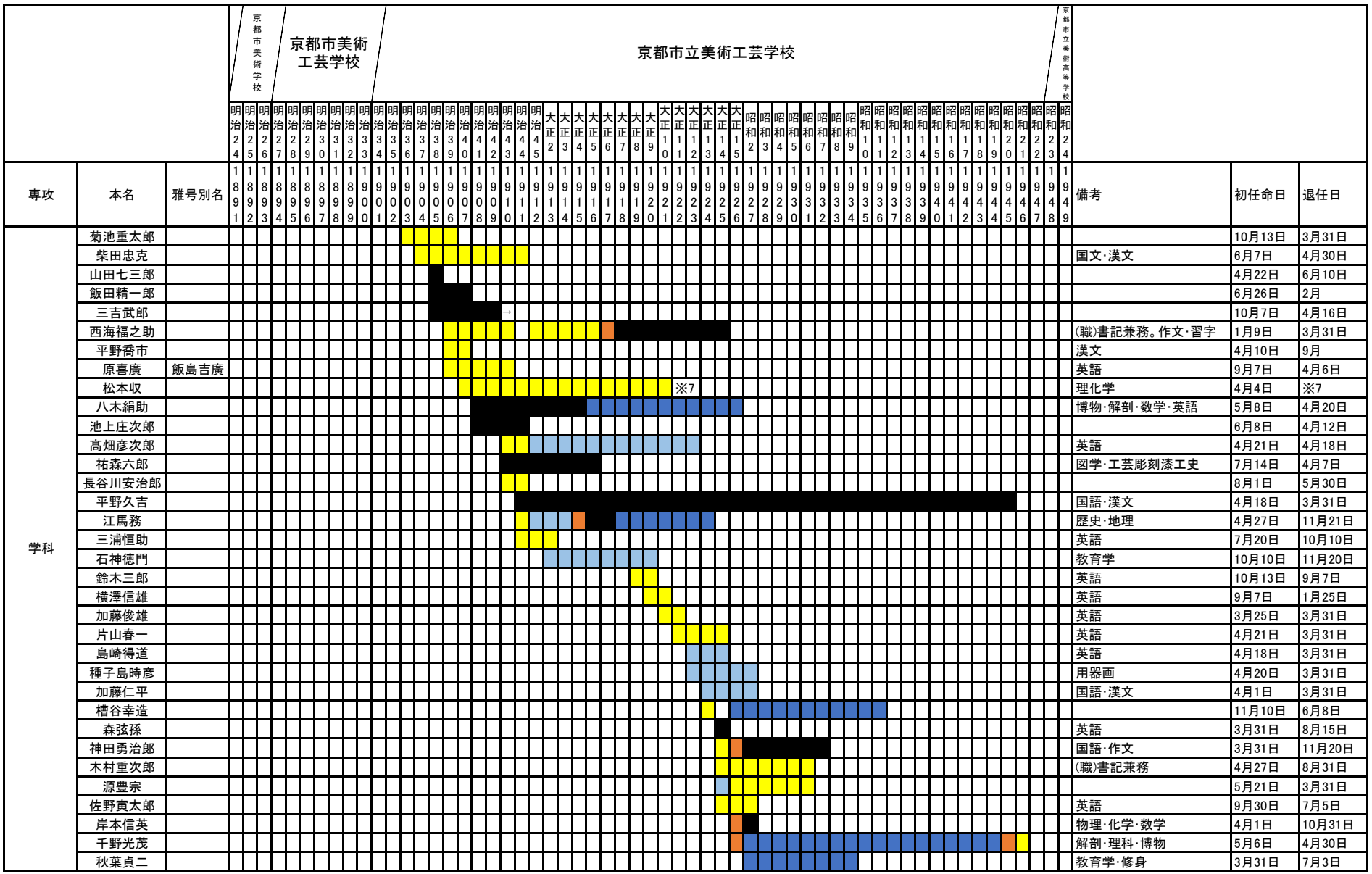


専攻	本名	雅号別名	備考	初任命日	退任日
図案科（工芸図案科）	青木幸治郎	蘚石		6月24日	9月8日
	千熊宇平	章禄		4月27日	3月31日
	大橋　寔			3月31日	※4
	田村勝三郎	春暁		8月31日	※3
	山鹿健吉	清華		8月31日	4月30日
	森　守明			9月8日	3月31日
	山田秀藏	江秀		9月14日	12月5日
	太田喜二郎			9月18日	4月30日
	片山行雄			5月4日	4月30日
	丸毛又三郎			9月9日	3月31日
	新井　完			3月18日	4月30日
	中川貞吉			3月31日	3月31日
	笠間嘉一郎			3月31日	※4
	井上三郎			10月25日	※4
彫刻科	大村峰吉	西崖		7月31日	10月8日
	林　美雲			10月21日	2月26日
	亀田徳太郎	杢介		3月31日	10月1日
	国安虎三郎	稲香		7月5日	8月7日
	安藤三郎	如水		4月8日	4月30日
	饗場伊三郎			5月10日	4月30日
	船津　亨			4月17日	10月
	上野守三			10月	3月31日
	矢野判三			4月7日	※4
	北村西望	西望	※5	2月8日	※5
	建畠彌一郎	大夢		2月28日	3月22日
	石本恒介	暁海		8月7日	8月23日
	松田尚之			10月2日	9月10日
	藤庭賢一			8月31日	※4
漆工科（描金科）	湯浅久吉	守隆		1月22日	9月23日
	伊藤貞文			4月21日	7月31日
	国重篤介			6月11日	1月18日
	富田幸七	光一		11月18日	3月17日
	岩村眞次郎	光眞		4月14日	9月30日
	富田　誠			5月23日	10月10日

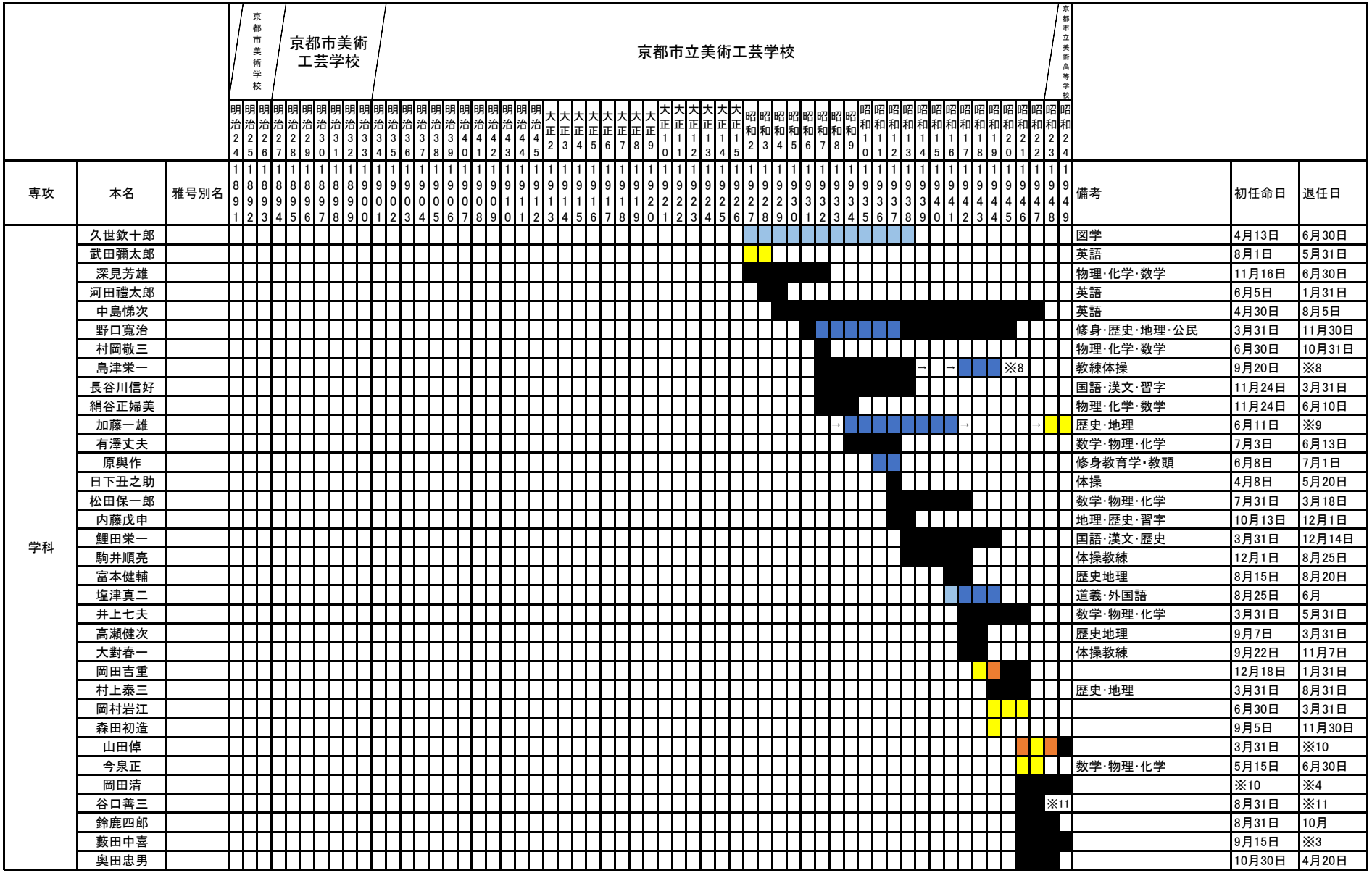
京都市美術学校 / 京都市美術工芸学校 / 京都市立美術工芸学校 / 京都市立美術高等学校

明治24（1891）～明治45（1912）、大正2（1913）～大正15（1926）、昭和2（1927）～昭和24（1949）

専攻	本名	雅号別名		備考	初任命日	退任日
漆工科（描金科）	江馬長治	長閑			8月13日	9月30日
	平舘酋一郎	嘉邦			10月15日	11月30日
	奥村 亨	霞城			10月15日	11月8日
	水内平一郎	杏平			2月28日	※4
	平石孝	晃祥			5月31日	※4
建築科	青山正義				3月31日	※3
	片山彬				4月20日	9月10日
	野々村五四男				4月1日	6月30日
	北野重利		※6		4月10日	※6
	前田良三				8月1日	※3
	南 廣吉				10月30日	5月20日
学科	末広虎之助			数学	7月3日	12月
	吉田秀穀				3月31日	11月22日
	富岡百錬	鉄斎		修身・故実	5月19日	3月31日
	山本章夫	渓愚			5月19日	5月6日
	上田正當				10月17日	3月1日
	宮崎富志男				7月10日	1月30日
	清田専蔵				2月1日	3月31日
	藤原源二			国文	4月1日	9月9日
	寶山良雄			修身	1月26日	4月19日
	黒田啓太郎			国文・漢文・博物	1月26日	6月10日
	脇谷洋次郎			理科	2月17日	10月31日
	湯本文彦			漢文	8月31日	9月26日
	堀十五郎			(職)退任後書記。数学・物理・化学	4月25日	3月31日
	山科言縄			故実	6月25日	3月31日
	中川重麗	四明	→	審美学	10月16日	4月16日
	松田清太郎			体操	12月13日	4月
	荒木矩			漢文・作文・歴史・美術工芸史	12月28日	5月31日
	徳永佐助	鶴泉		欧文翻語・欧州美術史	7月30日	4月30日
	宮島幹之助			生物学・解剖	10月16日	9月30日
	松室重光			建築沿革	12月6日	8月6日
	藤木左市				4月19日	6月7日
	苅谷無隠			漢文	9月26日	3月31日
	前田喜市			(職)退任後書記。体操	5月27日	5月31日



専攻	本名	雅号別名	備考	初任命日	退任日
学科	菊池重太郎			10月13日	3月31日
	柴田忠克		国文･漢文	6月7日	4月30日
	山田七三郎			4月22日	6月10日
	飯田精一郎			6月26日	2月
	三吉武郎			10月7日	4月16日
	西海福之助		(職)書記兼務。作文･習字	1月9日	3月31日
	平野喬市		漢文	4月10日	9月
	原喜廣	飯島吉廣	英語	9月7日	4月6日
	松本収		理化学	4月4日	※7
	八木絹助		博物･解剖･数学･英語	5月8日	4月20日
	池上庄次郎			6月8日	4月12日
	髙畑彦次郎		英語	4月21日	4月18日
	祐森六郎		図学･工芸彫刻漆工史	7月14日	4月7日
	長谷川安治郎			8月1日	5月30日
	平野久吉		国語･漢文	4月18日	3月31日
	江馬務		歴史･地理	4月27日	11月21日
	三浦恒助		英語	7月20日	10月10日
	石神徳門		教育学	10月10日	11月20日
	鈴木三郎		英語	10月13日	9月7日
	横澤信雄		英語	9月7日	1月25日
	加藤俊雄		英語	3月25日	3月31日
	片山春一		英語	4月21日	3月31日
	島崎得道		英語	4月18日	3月31日
	種子島時彦		用器画	4月20日	3月31日
	加藤仁平		国語･漢文	4月1日	3月31日
	槽谷幸造			11月10日	6月8日
	森弦孫		英語	3月31日	8月15日
	神田勇治郎		国語･作文	3月31日	11月20日
	木村重次郎		(職)書記兼務	4月27日	8月31日
	源豊宗			5月21日	3月31日
	佐野寅太郎		英語	9月30日	7月5日
	岸本信英		物理･化学･数学	4月1日	10月31日
	千野光茂		解剖･理科･博物	5月6日	4月30日
	秋葉貞二		教育学･修身	3月31日	7月3日


京都市美術学校
京都市美術工芸学校
京都市立美術工芸学校
京都市立美術高等学校
明治24 明治25 明治26 明治27 明治28 明治29 明治30 明治31 明治32 明治33 明治34 明治35 明治36 明治37 明治38 明治39 明治40 明治41 明治42 明治43 明治44 明治45 大正2 大正3 大正4 大正5 大正6 大正7 大正8 大正9 大正10 大正11 大正12 大正13 大正14 大正15 昭和2 昭和3 昭和4 昭和5 昭和6 昭和7 昭和8 昭和9 昭和10 昭和11 昭和12 昭和13 昭和14 昭和15 昭和16 昭和17 昭和18 昭和19 昭和20 昭和21 昭和22 昭和23 昭和24
1891 1892 1893 1894 1895 1896 1897 1898 1899 1900 1901 1902 1903 1904 1905 1906 1907 1908 1909 1910 1911 1912 1913 1914 1915 1916 1917 1918 1919 1920 1921 1922 1923 1924 1925 1926 1927 1928 1929 1930 1931 1932 1933 1934 1935 1936 1937 1938 1939 1940 1941 1942 1943 1944 1945 1946 1947 1948 1949
専攻 本名 雅号別名 備考 初任命日 退任日
学科
久世欽十郎 図学 4月13日 6月30日
武田彌太郎 英語 8月1日 5月31日
深見芳雄 物理･化学･数学 11月16日 6月30日
河田禮太郎 英語 6月5日 1月31日
中島悌次 英語 4月30日 8月5日
野口寛治 修身･歴史･地理･公民 3月31日 11月30日
村岡敬三 物理･化学･数学 6月30日 10月31日
島津栄一 教練体操 9月20日 ※8
長谷川信好 国語･漢文･習字 11月24日 3月31日
絹谷正婦美 物理･化学･数学 11月24日 6月10日
加藤一雄 歴史･地理 6月11日 ※9
有澤丈夫 数学･物理･化学 7月3日 6月13日
原與作 修身教育学･教頭 6月8日 7月1日
日下丑之助 体操 4月8日 5月20日
松田保一郎 数学･物理･化学 7月31日 3月18日
内藤戊申 地理･歴史･習字 10月13日 12月1日
鯉田栄一 国語･漢文･歴史 3月31日 12月14日
駒井順亮 体操教練 12月1日 8月25日
富本健輔 歴史地理 8月15日 8月20日
塩津真二 道義･外国語 8月25日 6月
井上七夫 数学･物理･化学 3月31日 5月31日
高瀬健次 歴史地理 9月7日 3月31日
大對春一 体操教練 9月22日 11月7日
岡田吉重 12月18日 1月31日
村上泰三 歴史･地理 3月31日 8月31日
岡村岩江 6月30日 3月31日
森田初造 9月5日 11月30日
山田倬 3月31日 ※10
今泉正 数学･物理･化学 5月15日 6月30日
岡田清 ※10 ※4
谷口善三 ※11 8月31日 ※11
鈴鹿四郎 8月31日 10月
藪田中喜 9月15日 ※3
奥田忠男 10月30日 4月20日

京都市美術学校 / 京都市美術工芸学校 / 京都市立美術工芸学校 / 京都市立美術高等学校

専攻	本名	雅号別名	明治24 1891	明治25 1892	明治26 1893	明治27 1894	明治28 1895	明治29 1896	明治30 1897	明治31 1898	明治32 1899	明治33 1900	明治34 1901	明治35 1902	明治36 1903	明治37 1904	明治38 1905	明治39 1906	明治40 1907	明治41 1908	明治42 1909	明治43 1910	明治44 1911	明治45 1912	大正2 1913	大正3 1914	大正4 1915	大正5 1916	大正6 1917	大正7 1918	大正8 1919	大正9 1920	大正10 1921	大正11 1922	大正12 1923	大正13 1924	大正14 1925	大正15 1926	昭和2 1927	昭和3 1928	昭和4 1929	昭和5 1930	昭和6 1931	昭和7 1932	昭和8 1933	昭和9 1934	昭和10 1935	昭和11 1936	昭和12 1937	昭和13 1938	昭和14 1939	昭和15 1940	昭和16 1941	昭和17 1942	昭和18 1943	昭和19 1944	昭和20 1945	昭和21 1946	昭和22 1947	昭和23 1948	昭和24 1949	備考	初任命日	退任日
学科	水上良一																																																										■	■	■			10月31日	6月30日
	安達治郎																																																										■	■	■		修身･歴史･地理･公民	12月31日	10月
	佐藤大気美																																																											■	■	■	(職)教頭	11月15日	※3
	原田幸之助																																																											■(黄)	■(黄)	■(黄)		11月30日	※9
	落合信子																																																											■	■	■		1月15日	※9
	岩井忠熊																																																												■		歴史	4月30日	10月
	平野弘																																																												■	■		4月20日	※9
	真野磯三郎																																																												■	■		9月1日	※9

凡例

1 本表は京都市美術学校から京都市立美術高等学校までの教員の在職期間を判明する範囲で一覧したもの。
2 教員名の配列は各専攻別に初任命日が早い者から並べている。
3 教員名の専攻への振り分けは、できる限り資料に従ったが、不明な者もあり完全ではない。
4 教員名の表記は本名によるが、雅号別名を付記した。色分けしたものは学校卒業者。
5 備考には役職や担当科目などを記載する。
6 表中に示す期間の最初と最後の期日を初任命日と退任日として記載した。
7 表中の表現に注意を要するものについては※により注記を加えた。
8 1日でも在職した年のマスを以下の色分けにより塗りつぶしている。

- 美術工芸学校等教員（助手･助教諭･教諭･教員心得･地方教官を含む）
- 美術工芸学校等嘱託教員
- 嘱託と専任の切り替え
- 短期間の断絶を含む
- 美術工芸学校等教員と繪画専門学校教員の兼任
- 美術工芸学校等嘱託教員と絵画専門学校教員の兼任
- → 絵画専門学校との異動関係

注
※1 表外に初任命日があるため割愛。
※2 表外に初任命日あり。本表内の任命日のみ記載。
※3 昭和22年7月1日以後昭和24年3月31日までに退任。
※4 昭和24年4月1日日吉ケ丘高等学校へ異動。
※5 昭和17年4月30日以後昭和21年7月1日までに退任。
※6 昭和21年7月1日までに退任。
※7 昭和21年7月1日までに退任。
※8 昭和19年4月1日以後21年7月1日までに退任。
※9 昭和24年3月31日までに退任。
※10 昭和23年6月30日以後昭和24年3月31日までに退任。
※11 昭和22年6月30日までに退任。